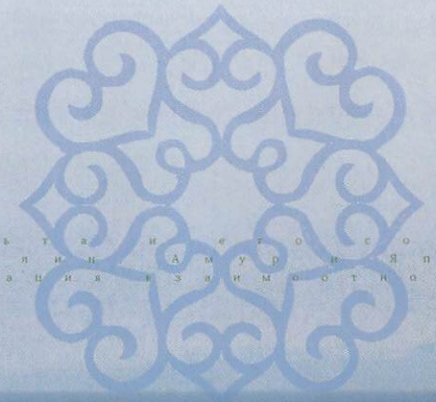


北海道立北方民族博物館第26回特別展

ウイルタと その隣人たち

サハリン・アムール・日本
つながりのグラデーション



У й л ь т а и е г о с о с е д и м
С а х а л и н и А м у р и Я п о н и я
Г р а д а ц и я к з л и м о т н о ш е н и я

2011.7.16【土】▶10.16【日】



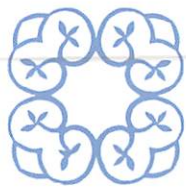
開館時間 9:00-17:00 / 10月は9:30-16:30
休館日 10月3日(月)、10月11日(火)

観覧料	特別展	常設展	セット割引
一般	450(300)円	450(360)円	700(660)円
65歳以上	300円	無料	—
高大生	150(120)円	150(120)円	240(240)円

()内は10名以上の団体料金

主催 北海道立北方民族博物館 (指定管理者 財団法人北方文化振興協会)
協力 ウイルタ刺繍サークルフレップ会 中村和之氏 津曲敏郎氏 山田祥子氏
ビビコワ=エレナ (Bibikova Elena) 氏
フェジャエワ=イリーナ (Fedjaeva Irina) 氏

 北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples



ウイльтаは北海道のすぐ北にあるサハリン島に暮らしてきた民族です。

人口は少なく(2002年の統計で約300名)、祖先は大陸からわたってきたと考えられています。

サハリン島にはウイльтаの他に、樺太アイヌ、ニブフの人たちが暮らし、さらに対岸のアムール流域には同じ系統の言葉話すツングースの諸民族がおり、ウイльтаはこれらの人びとと関わりをもってきました。そのため文化要素の中には、こうした諸民族との共通性があります。

19世紀になり北からロシア人が、南から日本人がこの島に入ってくると、ウイльтаの生活は大きく変化しますが、また一方で、独特の文化を保ち続けてもきました。ここには、ウイльтаのたくましさや柔軟性を見ることができます。

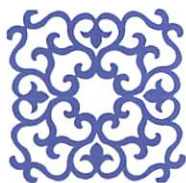
第二次世界大戦後は、日本に移住してきたウイльтаもおり、特に網走との縁が深まってゆきました。



白樺樹皮製容器(左:ウイльта、右:ニブフ)
サハリン、アムールの諸民族は白樺樹皮をよくつかった。
(昭和13[1938]年オタス収集)



樺太庁時代 オタスの杜(昭和12[1937]年 服部健撮影)



サハリン島は長い間どこの国でもありませんでした。その後、日露共同領有、ロシア全島領有そして、

日露戦争後はサハリン島の北緯50度以南は日本領となりました。暮らしていた場所が日本領となったウイльтаは、その多くが敷香(現在のポロナイスク)郊外のオタスの杜とよばれた場所に住み、学校では日本語が教えられました。オタスには大勢の日本人観光客が訪れました。



ウイльтаの紙人形
昭和16(1941)年頃



網走でも続けられたウイльтаの儀式「ブッキチュリ」の様子
大切にしている木偶「セフ」をイソツツジとエゾマツの葉を燃やした煙でくゆらす。占いも行っている(動くといふ)。



ゆりかご/ウイльта(昭和13[1938]年オタス収集)



皿敷き/ウイльта(昭和13[1938]年オタス収集)
日本人観光客向けの土産品

ウイльтаの切り文様
右:ビビコウ=エレーナ作 左:北川アイ子作
表:ダーヒンニエニ=ゲンダーヌ作